

# 前置詞の語彙的意味について考える

本 間 幸 代

## はじめに

フランス語の前置詞には、それぞれ実に多様な用法がある。いずれの前置詞に関しても、複数の用法間で意味的関連が容易に想像できる場合とそうでない場合があり、中には何ら共通点が無いように思えるものさえある。例1と2は、それぞれ前置詞 *en* と *par* の用法から二つを選び並べて書いたものであるが、二つの用法を統一的に説明するのは、少なくとも一見した限りでは難しく思えるのではないだろうか。

1. a. Un dictionnaire *en* trois volumes (3巻構成の辞書)  
b. Il a lu ce livre *en* trois heures. (彼は3時間でその本を読んだ)
2. a. Laurent va à Paris *par* avion. (ロランはパリに飛行機で行く)  
b. La route est enneigée *par* endroits. (道には所々雪が降り積もっている)

まず例1は前置詞 *en* の場合であるが、aにおいて *trois volumes* は辞書の構成要素であるのに対し、bでは、*trois heures* は本を読み終えるのにかかった時間である。また、例2は前置詞 *par* の場合であるが、aにおいて *avion* は移動手段を表しているが、bでは *endroits* は雪が降り積もっている場所を表しており、二つの用法は完全に分かれているように思える。これらの例を見た限りでも、各前置詞の様々な用法に統一的な説明を与えるのは不可能だと一見思えるだろう。本稿では、これが十分に可能であることを示すと共に、不可能であると一般的に思わせてしまう要因について考察する。本稿では、前置詞は前後にある二つの項を結びつける役割があると考え、全ての前置詞の用例を *X prép. Y* という形式に当てはめて分析する。また、本稿における個々の前置詞の「意味」とは語彙の意味を指し、例えば前置詞 *à* であれば、*X à Y* で表される全ての用法に当てはまる *X* と *Y* 間の固有の法則を指す。紙面が限られている関係もあり、前置詞 *à*, *en*, *par*, *dans* それぞれに関し結びつきが想像しづらい用法を幾つかに絞って分析し、それらを説明するのに十分な法則を提示するに留める。また先行研究に関しても膨大な数に上るため割愛する。

## 1. 前置詞 *à* の場合

前置詞 *à* の後続語句は、*Jean vient à Paris* (ジャンはパリに来る) などの例では場所・到達地点を表すが、*salade au maïs* (トウモロコシ入りサラダ \**au* は前置詞 *à* と定冠詞 *le* の縮約形) では特徴を表し、*un livre à dix euros* (10ユーロの本) では値段を、*laver ses vêtements à la main* (服を手洗する) では方法を表している。では、前置詞 *à* の様々な用法の間に共通法則を見つけるのは可能かどうか、下記の例3から見ていくことにする。

### 3. Salade au maïs (トウモロコシ入りサラダ)

この例において、トウモロコシ (maïs) は土台のサラダにトッピング的に添えられたもの、あるいは副材料として加えられたものを指し、サラダの主材料ではない。これは、主にトウモロコシで構成されるサラダを指す場合の *salade de maïs* と対比される。つまり *salade au maïs* のように à が使われている場合、maïs は *salade* という土台の存在を前提として付加されたものであるということが言える。更に maïs は、サラダに特徴を与えサラダをタイプ化する役割を果たしていると言える。*Salade au maïs* と言えば、一粒や二粒だけではなく、サラダを特徴づけるのに十分な量のトウモロコシが添えられた状態を連想する。*Salade au maïs* のように GN1+à+GN2 (GN=Groupe nominal) の形式で表される名詞句の場合、GN2 は総称的意味を表すことが特徴として挙げられる。総称的意味で使われる場合、名詞は固有の概念を表し、その固有性によって他の概念と区別する働きを持つ。Maïs の場合は、トウモロコシという固有の属性を持った種を表し、その固有性によって他のあらゆる属性と区別される。*Salade au maïs* では、この固有性によってサラダをタイプ化し、他のタイプのサラダと弁別していると言える。以上を X à Y の形式に当てはめてまとめると、次のように言える。

- ① Y は、X の成立・完成を前提とした上で付加される要素である。
- ② Y はその属性の固有性によって Y' (Y 以外) と区別され (対立し)、X に弁別機能を付加している。

同様の例として、*tarte aux fraises* (いちごタルト)、*glace à la vanille* (バニラアイス)、*les personnes aux yeux bleus* (青い目をした人々) など多数挙げられる。

では、下記の例のように à の後続語句が値段を表している場合はどうだろうか。

### 4. Un livre à dix euros (10 ユーロの本)

例 4 における dix euros は、un euro, deux euros, trois euros... という値段の序列関係において本の価値を位置づける役割を果たしている。それぞれの値段はこの序列関係において他によって代わることのできない固有の数値であることから、これらの値段は各々その固有性によって他と区別され、本の価値としての弁別機能を果たしていると言える。また、もう一つ重要な特徴としては、dix euros が既に出来上がった本に付加されている価値であって、本の構成に必要な要素ではないことが挙げられる。これは、un livre de cuisine (料理の本) のように、前置詞 de の後続語句が本の内容、つまり本を構成するために必要不可欠な要素を表している場合と対比される。このように、例 3 に関して挙げた特徴が例 4 にも当てはまることが分かる。例 4 と同様に理解できる例として、Marie habite au deuxième étage (マリーは 3 階に住んでいる<sup>1</sup>) や Jean arrive à trois heures (ジャンは 3 時に到着する) など、à の後に序数を含む語句や時間を表す語句が続くケースが挙げられる。

最後に、à の後続語句が場所を表す場合を考えてみたい。

### 5. Jean vient à Paris. (ジャンはパリに来る)

この例 5 において、Paris は移動の最終地点を表している。つまり venir という行為が完了する地点を表している。(もし前置詞を de に換えて Jean vient de Paris (ジャンはパリから来る・パリ出身だ) とすると、Paris は venir という行為が発生する起点を表す。) また、Paris は固有名詞であり、他の都市とその固有

性によって区別される（対立する）。

このように、これまで分析してきた *à* の用法に関しては、Y は X の成立・完成を前提とした上で付加される要素であり、その固有性によって Y' (Y 以外) と区別され（対立し）、X に弁別機能を付加していると言える。

## 2. 前置詞 *en* の場合

冒頭で例 1.a, 1.b を挙げ、両者における *en* の用法間で共通の法則を見出すのは一見難しく思えるであろうと述べた。しかし、これらの間にもう一つ別の例を加えて下記のように並べると、漠然とではあるが、何か共通する要素が見えてこないだろうか。

1. a. Un dictionnaire en trois volumes (3 巻構成の辞書) (再掲)
6. L'examen s'est déroulé en trois étapes. (試験は 3 段階に渡って行われた)
1. b. Il a lu ce livre en trois heures. (彼は 3 時間でその本を読んだ) (再掲)

例 1.a は 3 巻で完結している辞書を指している。つまり「trois volumes」(Y) で「un dictionnaire」(X) としての完結性が体现されている。例 6 では「trois étapes」(Y) が試験の開始から終了までの全過程 (« l'examen + se dérouler »: X) を成しているの、やはりこの例においても、Y の枠内において X の完結性が体现されていると言える。例 1.b でも同様に、「trois heures」(Y) の枠内において「lire ce livre」(X) という行為の完結性が実現されていると言える。特に例 1.b は、*en* を pendant に置き換えた場合と比べると違いが明らかである。Il a lu ce livre pendant trois heures という発話文は、本を読む行為が 3 時間続いたことを述べるだけであり、読み終えたとは解釈されない。ここで例 1.a, 6, 1.b の共通点をまとめると、*en* に後続する語句 (Y に相当) が量的広がり (空間的または時間的広がり) を表しており、その広がりの中で完全性・完結性を実現していると言える。つまり、その広がりには外部との相補性または対立など、他者との関連性 (他者性) が考慮されていないということである。

次に、*en* が国名を表す語の前につく場合について考える。

7. Jean habite en France. (ジャンはフランスに住んでいる)

フランス語では、発音が関係する場合を除き、国名が男性名詞単数である場合は *au* に、女性名詞単数である場合には *en* に先立たれるという規則がある。名詞の性によって共起する前置詞が異なるのは、前置詞の後続語句が国名あるいはフランスの地方名や県名である場合に限られる。よって、名詞の性の違いの裏に隠れた要素が前置詞の選択に影響を及ぼしており、このような特例を発生させているのではないだろうかと疑問を抱くことになる。Homma (2010) では、博士論文の指導教官が女性である場合、時に応じて directeur de thèse (directeur は男性形) と directrice de thèse (directrice は女性形) という言い方を使い分けることにヒントを得てこの問題の解明を試みた。Homma が述べたとおり、博士論文口頭審査の告知書や論文の表紙などでは、論文執筆者、指導教官、審査員の名を肩書と共に記載するが、この場合、指導教官の肩書は男女の区別なく男性形を用い directeur de thèse と書く。つまり、「指導教官」としての役割によって「論文執筆者」、「審査員」などに対立する場合は男性形を用いるということである。このように考えると、「男性形」は固有の概念または特

性によって他と対立する際に使われると推測できる。一方、例8のように日常会話で指導教官を話題にする際は、その指導教官が女性であるならば女性形を用い *directrice de thèse* と言う。

8. Je vais à Paris pour voir ma directrice de thèse. (私は指導教官に会うためにパリに行く)

つまり、指導教官を一個人として捉える場合は、その性差が文法上の形態に反映され、男性形と女性形を使い分けるということである。以上を以下の表にまとめる。

指導教官の生物的な性	「指導教官」という役割が他の役割と対立関係に置かれる場合	指導教官を一個人として捉える場合
男性	男性形	男性形
女性		女性形

重要なのは、女性形を用いるのは指導教官を一個人として捉える場合に限られるということである。動物に関しても同様で、犬や馬などと区別される種別としての「猫」は、オスかメスかにかかわらず男性形を用い *chat* と言う。個別の猫を話題にする場合は、オス猫であれば男性形を用い、メス猫であれば女性形の *chatte* を使う。やはり女性形を使うのは個別の猫に言及する場合に限られるのである。よって、いわゆる「男性形」とは、性別を問わず種別や役割を問題とするためにまず作られた形であり、「女性形」とは、それぞれの個体に言及する際に性別を区別するために作られた新たな形であると考えられるのである。このように考えると、男性形は「無標形」、女性形は「有標形」と言うほうがより理にかなっていると思われる。以上の考察により、男性形（無標形）は固有の属性によって他の概念と対立するという性質を持ち、女性形（有標形）は個体そのものだけに目を向ける際に用いられるのだと推測できる。

ここで、国名を表す語の文法上の性によって *en* と *à* を使い分けるという問題に戻る。国名の場合、男性名詞あるいは女性名詞というように国ごとに性が決まっており、この点において *directeur de thèse* / *directrice de thèse* のように一つの名詞に男性形、女性形という二つの性がある場合と大きく異なる。しかし、以上述べたような文法上の性差の裏に隠れた要素が、何らかの理由により国名を表す語の場合にも反映されていると考えられるのである。そしてそれが *habiter* (*en France* / *au Japon*) の場合のように *en* と *à* の使い分けにも関わっていると推測できる。まず *en* と共起するのは国名が女性名詞の場合であることについては、文法上の「女性」という性に関する先述の考察により、その名詞の指示対象には外部との対立、つまり他者性が想定されておらず、指示対象をそれ自体のみで捉えていると考えられる。そして *en* についても、後続する語句の指示対象に他者性が想定されていないことを特徴の一つとして述べた。よって、*en* と女性名詞の国名との間には親和性があると言えるのである。以上の考察から、*en* の後続語句が国名である場合でも、量的広がり（この場合は空間的広がり）の枠内において他者性の欠如が体现されていると結論付けることができる。

一方、男性名詞の国名と *à* が共起することについてはどのように説明できるのだろうか。まず *X à Y* の形式においては、*Y* に相当する語句の指示対象が、固有性によって他者と対立すると認識されると1章で述べた。次に、文法上の「男性」についても固有性による他者との対立という要素があると先述した。よって、前置詞 *à* と文法上の男性形（無標形）とは親和性があると言えるのである。

### 3. 前置詞 dans の場合

まず、下記の二つの例を比較する。

9. La bague est dans la boîte. (指輪は箱の中にある)
10. Jean est entré dans un lycée privé. (ジャンはある私立高校に入学した)

例9では、dansの後続語句であるla boîteは指輪を物理的に包含している入れ物を指しているが、例10では、un lycée privéは教育機関としての私立高校を指しており、人が物理的に出入りする建物を指しているのではない。確かに、入学するというはその教育機関の影響の及ぶ範囲内で教育を受けるわけであるから、例9におけるdansの用法と同様の考え方ができると思うかもしれない。しかし、事はそれほど単純ではない。単に「ジャンは高校に入学した」と言いたいのであれば、例11のように前置詞àが使われ、限定辞も定冠詞になる。

11. Jean est entré au lycée. (ジャンは高校に入学した)

例11ではle lycéeが総称的な意味である場合と、ある特定の高校を指している場合とが考えられるが、ここでは総称的な意味であることを想定して論を進める<sup>2</sup>。例10と例11を比べると、入学したのが« un lycée privé »であればdansを選択し、「le lycée」ならばàを選択するので、「dans+不定冠詞+名詞+形容詞」対「à+定冠詞+名詞」という文法規則を明示して事が足りると思えるかもしれない。しかしそれでもやはり、冠詞の違いや形容詞の有無によって選択される前置詞が違ふことへの疑問は残る。ここで着目したいのは、例10においてun lycée privéが総称的な働きを持つle lycéeの下位分類を表しており、un lycée publicなど他の種の高校と相対的關係に置かれるという点である。つまり、un lycée privéは、他者との関係性を抜きにしては考えられない存在なのである<sup>3</sup>。1章で分析した前置詞àについても、YがY'と対立する(区別される)という意味では他者性があると言えるが、dansとàとは性質が異なる。X à Yの場合、Yはその固有性によってY'と対立するが、dansの場合は、YとY'それぞれが「分割されたパーツ」と捉えられる。

例10-11では前置詞dansとàの交替について比較検討したが、同様の交替は下記の例12-13に見るとおり、dansとenとの間にも見られる。

12. Pierre parlait en français. (ピエールはフランス語で話していた)
13. Pierre parlait dans un français parfait. (ピエールは完璧なフランス語で話していた)

例13では、dansの後続語句であるun français parfaitが、un français médiocre, un français approximatifなどに対する他者性を想起させることは先述の説明から容易に理解できるだろう。

ここで例9 (La bague est dans la boîte)に戻り、dansの後続語句であるla boîteが他者性を表しているか検討する。まず、この例の特徴として挙げられるのは、la boîteが物理的な入れ物を指すと解釈されるということである。これは、下記の例のように前置詞àと比較するとよく分かる。

14. a. J'ai mis le livre dans la poubelle. (私はその本をゴミ箱に入れた)
- b. J'ai mis le livre à la poubelle. (私はその本を捨てた)

15. a. Louis est dans la rue. (ルイは通りにいる)
- b. Louis est à la rue. (ルイは路頭に迷っている)

例 14.a では、la poubelle はごみ箱として機能していない単なる物理的な入れ物として解釈される。これに対し 14.b では、la poubelle はごみ箱本来の機能、つまり廃棄物が行きつく先としての機能だけを抽象的に表しており、実際にゴミ箱が物理的に存在しているかどうかは問題ではない。同様に、例 15.a では、la rue は物理的な空間を表しているが、例 15.b においてはそうではなく、生活する術が無くなったときに行きつく場所としての特性のみを抽象的に表している。例 15.b においては、Louis は通りにはおらず、高架線の下やどこかの家の軒下にいる可能性もある。以上の考察から、dans の働きによってその後続語句が物理的空間を表していると解釈されることが明らかになった。続いて、物理的空間に他者性があるのかどうか、またあるとしたらどのようなものなのか考えてみたい。例 9 (La bague est dans la boîte) における « la boîte » (箱) の状態を考えてみよう。おそらく、箱が置かれているテーブルなどとの接触面を除いて、周りに何も無い状態を想像するのではないだろうか。しかし、たとえ空気しかないように見えても、箱の周囲にある空間は必然的に物理的空間である。箱に限らず、少なくとも地球上の全ての物体は常に物理的空間と接しており、そのような空間に対する隣接性なしには考えられない存在なのである。よって、La bague est dans la boîte という発話文においては、「la boîte」がその周囲を取り巻いている物理的空間と隣接していることが他者性であると言える。そしてこれらの隣接している空間は、それぞれ我々が身を置いている世の中の空間を分割したパーツなのである。

#### 4. 前置詞 par の場合

まずは下記の二つの例を比べよう。

16. Laurent va à paris par avion. (ロランは飛行機でパリに行く)
17. L'enfant s'amusait par ici. (子供はこの辺りで遊んでいた)

例 16 では、par の後続語句の avion は移動手段を表しており、出発地から目的地への到達を可能とする媒介と捉えることができる。他にも、par に後続する語句が (広い意味で) 媒介を表していると捉えられる例は数多くあり、例えば envoyer un document par fax (書類をファックスで送る)、saisir quelqu'un par le bras (～(人)を腕で掴む)、passer par Lyon pour aller à Marseille (マルセイユに行くためにリヨンを経由する) などが挙げられる。しかし、例 17 では par の後続語句である ici が何らかの媒介であるとは考えにくい。では、例 16 と 17 に見られるような par の用法に共通の法則を見出すことは可能なかどうか、以下に詳しく分析していくことにする。

例 16 では、前置詞 en を使った場合 (aller à Paris en avion) と異なり、par の後続語句である avion は複数の選択肢の中から選ばれた移動手段であると解釈され、「他の移動手段ではなく飛行機で」というニュアンスが前面に出される。ここで例 16 を否定形にしてみると、更に重要な要素があることが分かる。

18. Laurent ne va pas à Paris par avion.

この発話文は、「ロランは飛行機ではパリに行かない」という意味であり、言い換えると、「ロランは確かにパリには行くが、飛行機ではなく他の移動手段で行く」ということである。つまり、ロランがパリに行くということが実現されるであろうことは否定されておらず、否定されているのは「*avion*」という移動手段である。ここで、説明が煩雑になるのを避けるために肯定形である例 16 (Laurent va à Paris par avion) に戻って考えてみたい。この例において、「*avion*」(Y) とそれ以外の移動手段(Y') は、「X (Laurent+aller à Paris) を実現させることができる」という条件のもとに形成された閉じられた選択肢群である。Y と Y' のいずれを選んでも X を実現させることは可能であるので、X-Y (ロランが飛行機でパリに行くこと) も X-Y' (ロランが飛行機以外の手段でパリに行くこと) もいずれも潜在的に可能である。しかし、X を実現するには Y または Y' かのいずれかを選択しなければならないので、これらの選択肢群は競合関係に置かれ、X を実現する手段として選択されるものとそうでないものを生み出す。よって、この Y は Y' に対して排他的であるのだが、Y' との競合関係なくしては考えられないという点からすると依存的でもある。本稿では、この関係を排除・依存の関係と定義しておく。この関係の存在により、最終的に Y が選択されて X-Y (Laurent va à Paris par avion) という関係が成立すると同時に成立し得なかった X-Y' の関係が想起され、「他の手段ではなく飛行機で」というニュアンスが生まれるのだと考えられる。以上述べた特徴は、par の後続語句が(広い意味で)媒介を表している場合に当てはまる。

では、先の例 17 のように par の後続語が媒介を表さない場合はどうだろうか。

#### 17. L'enfant s'amusait par ici. (子供はこの辺りで遊んでいた) (再掲)

*Par N* という前置詞句が「～の辺り」という意味になるのは、par の後続語句が *ici* (ここ)、*là* (そこ)、*là-bas* (あそこ) などの指示語である場合に限られる。これらの語とその他の語との違いは何だろうか。それは、まず指示語の指示対象は発話時における話者の視点に左右されるということであるが、これに加え、指示対象が常にその周囲に対する対比関係によって特定され、その際に指示対象以外の場所<sup>4</sup>が指示対象候補から排除されるということである。よって、*ici*、*là*、*là-bas* という語は、指示対象がそれ以外の場所に対して排除・依存の関係を想起させる素地を持っていると言える。例 17 における *ici* (Y) の指示対象は、発話時に対話者間で共有されている場所全体の中での位置関係を探るように、また *ici* 以外の場所(Y') との境界を引くかのように特定される。よって、先述した指示語の性質も併せて考えると、X (« l'enfant + s'amuser ») という事態が発生する可能性のある範囲全体の中で Y と Y' が選択肢群を成し、排除・依存の関係に置かれているのだと考えられるのである。例 17 から par を除いた文である L'enfant s'amusait *ici* (子供はここで遊んでいた) の場合は、全体の中における Y と Y' の排除・依存の関係が保持されず、*ici* (Y) の指示対象がピンポイントで特定されるだけに留まると考えられる。

では、次の例 19 はどうだろうか。

#### 19. La route est enneigée par endroits. (道路はところどころ雪が降り積もっている) (=2.b)

この例文は、「道路上には、特定はできないものの雪が降り積もっている箇所が散在する」と解釈される。道路という限定された範囲の空間がマイクロスペースで構成されており、そのマイクロスペースのいずれも、雪が降り積もっている箇所であり得る。つまり各マイクロスペースは、「*enneigé*」(X)

という状態を発生させる可能性を持つ閉じられた選択肢群を構成していると言える。この状態が実際に発生するミクロスペースとして、「endroits」(Y)は他のミクロスペース(Y')と競合関係に置かれていると考えられる。よって、この例においてもYとY'はXを実現させることに関し依存・排除の関係にあると言える。

## まとめ

前置詞 à, en, dans, par それぞれに関し、幾つかの用法を取り挙げて分析してきたが、いかに関連性が無いように思える用法間でも、共通の法則を見出すことは決して不可能ではないことを示すことができたと思う。共通の法則が見出しにくい要因は実に様々であることを確認した。en の場合、un dictionnaire en trois volumes と Il a lu ce livre en trois heures の二つの用例に関しては、時間経過が問題となっているかどうかの違いが共通法則を見えにくくしていた。また dans の場合は、entrer dans un lycée privé などの例が単なる文法規則の枠内で処理されるように見え、このことが、La bague est dans la boîte などの例のように dans の後続語句が物理的物体を表す場合と無関係であるように見せていた。Par についても、依存・排除の関係の現れ方は用法によってかなり異なり、特に L'enfant s'amuse par ici などの例に見られる用法に関しては、「～の辺り」という解釈のされ方にとられがちであること、また par の後続語句が媒介を表す場合 (aller par avion など) と違って、Y と Y' の競合関係が見出しにくいことが関係していた。個々の前置詞の用法全てに共通する法則など存在しないと主張が今日も根強く残っているが、それは、共通法則を見出しにくくしている要因が我々の想像に簡単には及ばないことがほとんどであるためだと思われる。

## 注

- 1 フランス語の deuxième étage というのは日本での 3 階を指す。
- 2 ただし、総称的意味、特定の意味のいずれの場合であっても、固有性によって他と区別される (対立する) という点においては同じである。総称的意味の場合は、属性の固有性によって、そして特定の意味の場合は存在の固有性によって他と区別される。
- 3 このような他者性 (altérité) については、Homma (2007) で指摘している。
- 4 説明が煩雑になるのを避けるため、本稿では ici, là, là-bas が場所を指示対象とする場合に限って論を進める。

## 参考文献

- Cadiot, P. (1991) « A la hache ou avec la hache? Représentation mentale, expérience située et donation du référent », *Langue française* 91: Prépositions, représentations, référence: 7-23.
- Fahlin, C. (1942) *Etudes sur l'emploi des prépositions en, à, dans au sens local*, Vilhelm Ekmans Universitetsfond, Uppsala, Almqvist & Wiksell.
- Gougenheim, G. (1938) *Système grammatical de la langue française*, Paris, D'Artrey.
- Homma, Y. (2005) « La source de 'l'approximation' dans par ici, par là, par là-bas », *LINX* 53, Université de Paris X: 121-134.
- Homma, Y. (2007) « Analyse critique et révision de quelques point de vue théoriques sur l'alternance entre A et DANS en vue d'une problématique de l'enseignement des prépositions françaises en FLE », Actes du Colloque international *Recherches en acquisition et en didactique des langues étrangères et secondes*, à la Sorbonne, Paris, France. (主催研究機関の Web サイトで数年掲載された後 HP が削除されたため、現在下記サイトにて公開 <http://researchmap.jp/read0155122/>)



- Homma, Y. (2009) *L'identité des prépositions dans leur variation: Approche énonciative de 'en', 'dans', 'pour' et 'par'*, Thèse de doctorat en Sciences du Langage, Université de Paris Ouest Nanterre La Défense.
- Homma, Y. (2010) « Etude sur l'emploi de "en" devant les noms de territoire en français », *Cahier de l'ED 139 Connaissance, Langage, Modélisation*: 35-53.
- Homma, Y. (2011) « Principes de fonctionnement de la préposition "en" et absence d'article dans son régime », *Langue française* 171: 77-88.
- 本間幸代 (2015) 「前置詞 à と par の意味的差異に関する一考察」『日本フランス語フランス文学会関東支部論集』第 24 号 : 1-14.

(ほんま ゆきよ 国際学科)